

1. 関東大震災後に上智カトリック・セツルメントを設立

戦前は日本も貧しかった。特に約 10 万 5 千人といわれる死者・行方不明者を出した 1923 年の関東大震災での惨状は酷かった。そのため上智大学教授フーゴー・ラサール神父は、学生たちと協力して、困窮者の多かった東京三河島町に上智カトリック・セツルメントを設立する案を発表した。



フーゴー・ラサールSJと参加した当時の学生たち、下の写真は、1932年頃の三河島



学内の教職員や学生から多くの賛同を得たので、大学は委員会を設けて慎重に調査研究した。その結果、1931年10月にバラック4戸を借家として三河島町にセツルメントを設立し、ラサール神父は二人の学生とそこに住み込んだ。

セツルメント (settlement) とは、スラムなどの貧しい地域に定住して、住民と触れ合いながら、教育、医療、保育などの活動を行うもので、学生の社会事業に対する体験と関心と呼び覚ますことも意図された。設立の目的について、上智カトリック・セツルメントの機関誌 (J.C.S、1934年) は、次の三つの項目を掲げている。一つは「最も困っている人々を救済する」ことである。二つ目は、できるだけ貧しい人と同程度の生活をしながら救援活動を行い、寄付金を経済的に使用すること。三つ目は、貧しい人が人間らしい暮らしをするために教育を施すことであった。上智大生の間では主にカトリック信者がセッター (居住者) として奉仕活動を行った。

最初の事業として、その年の11月に子ども会を発足し、家庭訪問を開始した。1932年1月には欠食児童に昼食を供給し、慶応義塾大学医学部の小川三郎博士の援助で健康相談室を開設した。また、週3回夜間を利用して英語教育も行っていた。

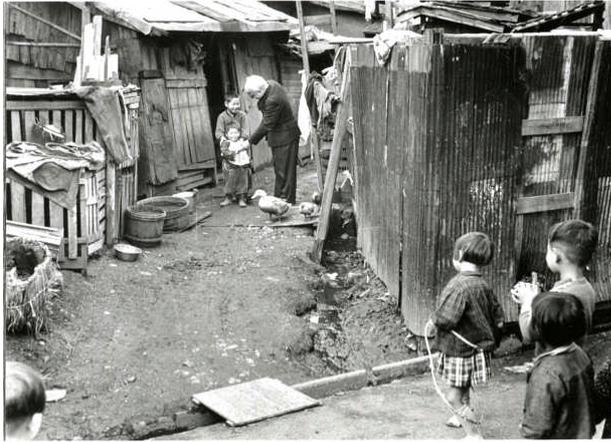
資金は主に寄付金に頼り、時にはバザーなどを開催して収益金に当てていた。『上智大学史資料集』(第三集)には、「日比谷公会堂でクリスマスコンサート開催、収益金1500円」との記載もある。

1933年に現在の地(荒川区町屋)に396坪の土地を購入して、バラック2棟を仮設

し、34年に木造2階建ての事業館を建設した。アロイジオ・ミヘル神父が副館長として着任し、36年には財団法人上智社会事業団となり、経営は上智学院を離れることになった。建物は第二次世界大戦の東京大空襲で灰燼に帰した。

2. 戦後の発展と上智大学

戦後の取組はすばやかだった。1947年には事業館を再建し、保育、医療、子ども会の事業を再開する。1952年には、財団法人から社会福祉法人上智社会事業団となり、アロイジオ・ミヘル神父が初代理事長に就任した。その後、上智大学関係者では、クラウス・ルーメル神父が第2代理事長、河野純徳神父が第3代理事長を務めている。また、学生も奉仕活動として子ども会を指導、英語を教えていた。



東京大空襲で家屋は焼失、人びとは長いバラック生活を強いられた。
訪問する館長のミヘルSJ

以後、上智大学が直接的に関わることはなくなったが、保育所、学童クラブ、病院、看護・介護サービスなどの多様な福祉サービス事業が展開されている。「上智厚生館保育園」「上智クリニック」など、「上智」の名前を引き継いでいる施設もあり、蒔いた種は枯れないで、生き残って育成していく。まさに聖書の言葉のように「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだら、豊かに実を結ぶようになる。」(ヨハネ福音書)ということである。フーゴー・ラサール神父と学生たちの蒔いた種は、大きく実を結んだのである。



セツルメント創設25周年記念に参加した
ラサールSJ(1956年)



子供たちに歌を教える学生セツラー
(1956年)、下の写真はお話を聞いている
子供たち(1959年)



セツルメント付属の上智診療所(1959年)

